

石切り山の人びと

竹崎有斐





少年少女／創作文学

石 切 り 山 の 人 び と

NDC 913 偕成社 266p. 21cm 1977年

1976年12月 1刷

1977年5月 3刷

著 者	たけ 竹	ぎき 崎	ゆう 有	ひ 斐
発行者	今	村	廣	

発行所 株式会社 偕 成 社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5

TEL(03) 260—3221 (代) 〒162

振替 東京5-1352番

本文印刷 新興印刷製本株式会社

多色印刷 小宮山印刷株式会社

製 本 文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。Printed in Japan

8393-719390-0904

© 竹崎有斐 北島新平 1976

石切り山の人びと

竹崎有斐



● まえがき

石切り山は、久住山脈がひくい丘
陵となつて、熊本の町のすぐそばまで、
足をのばしている、その先端にあつた。
そこら一帯は、昔から「清正の石蔵」
といわれ、石垣石を切りだす、大きな
石層地帯であつた。

山すそをとおり街道の両がわには、
三十軒あまりの、軒のひくい家がなら
び、石をわる玄翁の音が、一日じゅう
たえまなく、ひびいていた。



石切り山の人びと／もくじ

1	三人のがき大将	だいしやう	8
2	新しい敵	てき	24
3	山の上の人影	ひとかげ	37
4	二杯のかけうどん	はい	60
5	老人とつるばあさん	らうじん	79
6	橋の上の決戦	けつせん	91
7	なまいきな女の子		114
8	羊乳屋開業	やうにゅうや	129
9	にぎりしめた石	かいぎょう	149
10	あき家の会合	かいごう	168
11	こな雪の山で		182
12	石の子守歌	こもりうた	206
13	黒い鉄のベッド		222
14	川岸に立つ権六	かわぎし	236

作者と作品について 大石 真







著者・竹崎 有斐

1923年，熊本に生まれる。戦前の早大童話会を経て，現在「びわの実学校」同人，民話の研究会会員，日本児童文学者協会会員。主な著書に「とびこめのぶちゃん」「パイがこんがり焼けるとき」「だぶだぶさぶちゃん」「なき虫なば太郎」など。住所／東京都保谷市住吉町1-19-7

画家・北島 新平

1926年，福島県に生まれる。1944年に長野県に移り，71年上京するまで県下の中学校で教鞭をとる。「遠山祭り」「新野の雪祭り」のスケッチ集。「きょうまんさまの夜」「てんりゅう」「春駒のうた」「泥棒っ子」などのさしえ多数。住所／埼玉県川口市上青木町3-1373-2

石切り山の人びと

—— 竹崎 有斐



1 三人のがき大将^{だいしょう}



いま、五年一組は国語の時間である。

権六^{ごんろく}は、背中^{せなか}でいすをたおし、そっくりかえっていねむりをしていた。先生の声が、子守歌^{こもりうた}のようにとおくできこえている。

権六^{ごんろく}はいねむりの常習犯^{じょうしゅうはん}である。というより、いねむりをしに学校にきているようなものである。竹の根^ねむちでこつんとたたかれても、そのときは目をさますが、つぎのしゅんかん、またいねむりをはじめている。

だからへいねむり権六^{ごんろく}といわれてもしかたないとおもっている。もうひとつ、本名^{ほんみょう}の、阿能権六^{あのがんろく}をもじって、あほう権六^{ごんろく}。さらにちぢめてへあほ六^{ごんろく}という別名^{べつめい}もある。

でもこの別名^{べつめい}のほうは、先生が権六^{ごんろく}をどなたときつかうくらいのもので、同級生^{どうきゅうせい}はぜったいこの別名を口にしない。もし、あほ六^{ごんろく}というのなら、権六^{ごんろく}にいやというほどぶんなぐられるからである。

あほ六などという、いやな別名ができるのは、阿能権六というかわった名まえのせいにちがいない。だが、阿能のほうは代々のものだから、いまさらしかたない。しかし、権六のほうは、なんでこんな古くさい名まえをつけたのかと、おとうに文句をいったことがある。

するとおとうの弁解は、おまえのじいさんの名まえをもらっといただけよ。あんまり字をしらんけん、しかたなかと、あっさりしたものであった。そして、

「権六ちゆう名まえは、戦国の大将、柴田権六勝家とおなじだもん、よか名まえたい。」
といった。これは死んだじいさんのじまん話らしかった。

だがいまは昭和十八年、権六も昭和生まれである。いかにいなかのことであっても、名まえはと
きかれて、〈権六〉と返事するのは、なんともはずかしかった。

しかし、阿能という名字のほうは、権六はむしろとくいであった。

〈阿能〉は、織田信長の安土城をぎずいた石工の棟梁、穴太一族の流れである。権六の祖先もそう
で、加藤清正について、この肥後の国(熊本県)にきたのだと、おとうはいばっていた。現に、権六
の家もむかしからの石工である。

そのとききゆうに、戦闘機の編隊が、ものすごい爆音で校舎の屋根をかすめすぎた。

権六は、がくと、うしろにひっくりかえりそうになって、はっと目をさました。先生がなにか
質問をしたらしい。いっせいにあがった教室じゅうの手が、わいわいおどっているように、権六に
は見えていた。

権六はおもいきり両手をのばして、あくびをした。でもだれも見むきもしない。権六はつまらなくなつて、廊下のまどごしにそとを見た。畑のとうきびが、もう権六の手がとどかないくらいにのびて、葉の根もとにずんぐりした実が顔をだしている。

皮をむけば、ぎっしり実がつまっているはずである。七輪に火をおこして、とうきびを焼く。こんがりこげめがついて、ぶっつぶつと、実がはじける。うす皮でしょうゆをぬる。ぶーんこうばしいにおいがする。

「くいてえなあ。」

権六はおもわず、大きな声をだしてしまった。

「こら、あほ六！ なんばいうか。いまは授業ちゆうだぞ。ばかもんが。」
教室じゆうがどつとわらつた。

ひげづらの先生が、大またで権六の席にあるいてきた。そして権六の机の上に、教科書も帳面ものつていないのを見ると、ひげづらがますますこわくなった。

「権六、おまえ、教科書はどうした。わすれたらわすれたと、なんでいいにこんか。」

「おらあ、わすれちゃおらんばってん、なんでか教科書が、だまってやすんどります。」

「なに。教科書がやすんどる？ そら、どういふことじゃ。」

「はい。となりの組の留吉のやつがやすんどるもんだけん、教科書もいっしょにやすみですたい。」
権六はすましていった。このごろ権六は、自分の教科書をもってきたことがない。時間のまえに、

となりの組へいって、保田^{ほた}、つまり、もやし屋^やの留吉^{とめきち}からかりることになっている。

だいたい一組と二組は、掛け軸^{かけ}なんかのつごうで、おなじ授業^{じゅぎょう}がかなることがないから、教科書をかりても、留吉^{とめきち}がこまることはない。だが、きょうみたいに、留吉に学校をやすまれると、教科書までこないことになる。

「ばかもん！ 自分のをなんでつかわんか。」

そういわれても、ちょっとかんたんには説明^{せつめい}できない。

権六^{けんろく}も五年生になったすぐは、ひととおり教科書をもっていた。ほとんどは、となり村に嫁^{よめ}にいった叔母^{おば}さんの知り合いの家からゆずってもらったものだが、ほかに二冊^{ふた}だけ新しく買ったのがあった。権六は、その新しい教科書がうれしくて、カバンにいれて、だいにじにしまっていた。

だが、学校がはじまって五日^かめに、教科書がみなひっぱりだされ、むざんに半分以上^{いじょう}がやぶかれていた。犯人^{はんじん}は、三歳^{さい}になって、まだおつかあの乳^{ちち}をほしがる弟^{おとうと}の正^{しょう}ぼうのしわざであった。

すぐに、おつかあに文句^{もんく}をいったが、そのうち、まただれかにもろうてやるけん、しばらくしんぼうしとれと、いわれたまま、いまだにそのままである。

それでもさいしょのうちは、修理^{しゅうり}したりして、つかえるのは学校にもっていったが、どれがあつて、どれがないと考えるのが、だんだんめんどくさくなくて、ぜんぶ留吉^{とめきち}からかりことにしてしまった。借り賃^{かちん}は、ひと月にメソコ五枚^{まい}である。

「しょうがないなあ。」

あとで、あまっている教科書をさがしといてやるから、かえりに職員室しよくいんしつにこいと、先生は権六ごんろくにいった。だが権六は、恩おんをきせられて先生からもらうより、留吉とめきちからメンコ五枚まいでかりておくほうがずっとよかった。

だいいち教科書なんか、家にかえてから、ひらいてみることはまったくないし、授業じゆぎやうのときも、かざりみたいに机つくえの上にひらいておくだけだから、自分のものだろうが、留吉とめきちからかりたものだろうが、かわりはなかった。

となりの席せきの、級長きゆうちやうの野田のだが、権六ごんろくに教科書を見せてやろうと、いすをくつつけてきた。

「いらん。心配しんぱいするな。おらあ、もうそろそろ、かえるけん。」

権六ごんろくは、それがあたりまえのような顔をしていった。

教室には、まえとうしろに出入り口がある。権六ごんろくの席は、うしろの出入り口のすぐ横よこにあった。つまり、いねむりしていてもじやまにならない、いちばんうしろの、はしっこの席である。

だがこの席は、教室への無断むだん出入りにはすごくつごうがよかった。権六ごんろくは右足をのぼして、ほんのわずかずつ、出口の戸をあけはじめた。

先生は教科書を読みながら、教壇きやうだんにかえっていった。だが、教壇にあがって、こちらをふりむいたときには、権六ごんろくはもう席にはいなかった。

「あいつ、またずらかったな。」

先生はあわてて、廊下ろうかをのぞいたが、もう、かげもかたちも見えなかった。

「先生！ おれがつかまえてきてやる。」

自転車屋じてんしやの三郎さぶろうが、いきおいよく立ちあがった。

「こらっ！ いかんでもええ。」

先生がそういったときには、三郎さぶろうはもう、廊下ろうかにとびだして、走っていた。

「しまった。あいつにまでずらかられた。」

先生は、こまったという顔でわらっていたが、やはり三郎さぶろうも、それっきり教室にかえってこなかった。

権六ごんろくは教室をぬけたとたん、ねむけがとれたように敏捷びんしょうになった。校舎こうしゃのうらを、背せをひくくしてかけぬけ、うら門もんにとびついて、ひょいとのりこえた。

左肩ひだりかたに、さげカバンをかけ、右手にわらそうりをもってあるいている。権六ごんろくは学校のいきかえり、たいていはだしである。自分のそうりは自分でつくるのだから、なるべくはかないことにしている。

だが権六ごんろくはとうきび畑ばたけのまえまでくると、道の上にそうりをそろえておいた。そして、片足かたあしずつていねいに、足のうらのどろをはらって、はいた。そうりを手にもっていては、これからとうきびをかっぱらう作業さぎように不便ふべんだからである。

あたりに人影ひとかげはない。だが、とうきび畑ばたけというのは、たいてい農家のうかの庭さきから、見とおしのきくところにあるから、安心はできない。へたにとうきびのまえにつっ立っていると、すぐにうたが

われてしまふ。立つていても不自然でないように見せなければならぬ。

権六はさげカバンをみじかくして、首から胸のまえにかけると、とうきび畑にむかつて、しょんべんをはじめた。しょんべんをしながら、片手で、目のまえのとうきびを、ぼきりともぎとり、胸のカバンに入れた。

そして、すばやく横に一步移動して、また一本、カバンに入れた。権六は一步ずつ横にうつていき、しょんべんをしておわるあいだに、六本のとうきびを、カバンに入れた。

こういうとき、教科書のはいつていない、権六のカバンは、すぐ便利である。でもさすがにカバンは、六本のとうきびではちぎれそうになっていた。権六はカバンを肩にかけなおし、ぞうりをぬいで、二つあわせて手にもった。そのとき、つきあたりの農家の庭さきに、ちらっと人影が見えた。だが権六はにげるところか、その人影が見えた家のほうに、ゆうゆうとあるきだした。

「こんにちほ。」

権六は、庭さきにもがらを干しにきていたじいさんに声をかけて、庭をつつきり、家の横をとおりにぬけた。道にでて、農家のあいだを、ぐねぐねまがっていくと、もうそこは、街道であった。街道をすこしくだると、太子堂がある。聖徳太子さまをまつてあるのが、太子堂なのだが、四畳半ばかりの板張りのお堂は、がらんとしていて、ご神体などどこにもない。夜は夜警団が、ここを詰め所につかっているが、昼間は権六たちの集合場所になっている。

権六はカバンを肩からおろし、お堂のあがり口にどすんとおいた。と、そのはずみに、とうきび

が一本ころがりてた。そのとき、お堂どうのなかから、いきなりどなり声がとびだした。

「とうきびどろは、おめえかあ！」

権六けんろくはびくと、とびあがった。駐在ちゆうざいさんがお堂どうに、はりこんでいたにちがいない。にげようにも、足がすくんでうごかなかった。

「どこん畑はたけのとうきびじゃ。ぜんぶだせ。」

権六けんろくはいわれるままに、カバンをひっくりかえして、ごろごろ、とうきびをだした。

「うへえ、うまそうじゃ。」

お堂どうのなかの声がきゅうにかわって、とびらのかけから、にやりとわらった三郎さぶろうの顔がでてきた。権六けんろくは自分がみっともないかっこうであわてただけに、すごく腹はらがたって、いきなりとうきびを三郎になげつけた。

「おこるなっちゃ。わるかったけん。」

三郎さぶろうは頭をかかえてにげまわった。

「三郎、おまえ、いつのまにきたんじゃ。」

権六けんろくが教室をぬけだすとき、三郎はまだ、たしかに教室にいたはずである。

「そりゃあ、ぬし（おまえ）がぬけだしたからにゃあ、おれもぬけださにゃあ、そんなもん。ぬしが、とうきびのしょんべんどろやっとなるまに、さきまわりして、まっとったつよ。」

「そうけえ——」